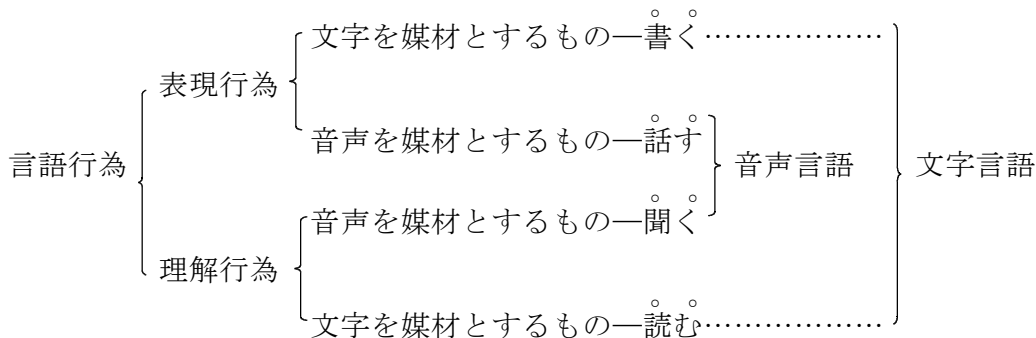


ときえだもとき こくごがく げんろん ぞくへん  
 時枝誠記著「国語学原論 続篇」岩波文庫、岩波書店 2008年3月14日刊を読む

## 言語過程説の基本的な考え方

1. (1) 言語は、その媒材の性質の相違によって、音声言語か、文字言語かのいずれかにおいて成立するものである。
- (2) 更に、これに、表現行為、理解行為の別を加味するならば、具体的な言語は、次の図に示すように、「書く」「話す」「聞く」「読む」のいずれかにおいて成立するものであって、そのいずれにも所属しない言語というものは考えられない。

2.



3. (1) 上の「話す」「聞く」「書く」「読む」行為を、言語の形態上の相違と名づけるならば、これらの言語形態は、それぞれに異なった性質と機能とを持っていることは明かである。
  - (2) 我々は、手紙を書く行為に、話す行為を代用させることは出来ないのである。
  - (3) 手紙の代わりに、口頭で用をたすことが出来たということは、当事者の状況が変わったからであって、遠隔の地に離れて、電話の便も無い場合は、ただ文字の機能に頼る以外に方法はないのである。
  - (4) これらの言語の形態上の性質と機能とを明かにすることは、言語研究上の重要な課題であるべきであったにも拘わらず、そのことが全く問題にならなかったのは、言語学の対象を、表現理解以前の資材的言語ラングに求めたからに他ならないのである。
  - (5) それも、言語学が、言語の系統関係や歴史的系譜を辿ることを、主要な課題としていた間は、さまで破綻を見せなかったが、人間生活における具体的な言語的事実の解明を課題とするに至って、ようやくその無力を暴露するに至ったのである。
4. (1) 「話す」「聞く」「書く」「読む」の言語形態は、それぞれに異なった性質と機能を持った言語行為であることは、既に述べた如くであるが、更に重要なことは、これらの形態は、相互に孤立して成立するものではなく、その間に、密接な交渉と、相互依存の関係が存在することである。
  - (2) 例えば、「話す」行為は、それ自身、単独に孤立して成立するものではなく、常に「聞く」

行為に連続し、屢々、「聞く」行為の予想の下に行為されるということである。

(3)これは、「書くこと」と「読むこと」の間にも存在することである。

(4)このことは、絵画や舞踊等が、ただ表現の満足ということだけで成立することのあるのと著しい対照をなすのである。

(5)故に、言語の観察において、表現、理解をそれぞれに孤立させて観察することは、言語の具体的な問題把握には、程遠いこととなるのである。

(6)ここに言語における伝達ということが、重要な研究課題とされる根拠が生まれて来る。

5. (1)言語を、表現理解の行為であるとする時、言語は、人間の行為一般の中に位置づけられなければならない。

(2)ここに行為というのは、

①例えば、歩行すること、飲食すること、遊戯すること等の意志的な身体運動は、<sup>もちろん</sup>勿論のこと、

②見ること、聞くこと、<sup>あじわ</sup>味うこと等の感覚作用

③また、判断、計画、想像等の思考作用をも含めて云うのである。

(3)歩くことが行為であるならば、考えることも、また、頭脳の行為に違いない。

(4)そして、言語<sup>すなわ</sup>即ち表現理解もそれら行為の一種であるということが出来る。

(5)人間の一切の行為は、その根本において、生の営みであることにおいて、これを生活と呼ぶことが出来る。

(6)飲食することは、云うまでもなく食生活に属することであるが、考えることも、また、人間の生活の一形式として、思索生活と云われている。

(7)同様にして、「読む」ことは、読書生活と呼ばれているのであるから、これを言語全体に拡張して、言語生活ということが云われても、少しも不当ではない。

(8)言語は、行為であり、活動であり、生活である。それは、次の等式によって示される。

**言語——言語行為——言語活動——言語生活**

上の等式の示すものは、言語があつて、それとは別に言語生活があるという考えを否定することを意味するのである。

(9)それは、あたかも、神仏を信ずることが、即ち宗教であり、宗教生活であり、宗教生活とは別に宗教が存在しないのと同じである。

(10)ただしかし、結婚生活、<sup>いんとん</sup>隠遁生活、享樂生活、經濟生活の話のように、言語生活という名称が熟さないのは、前者が、それ自身まとまった生活の類型として成立する可能性があるのに対して、言語行為は、それ自身まとまった生活の類型を形成しないことと(「読む」生活だけは比較的孤立性が強い)、言語行為が、常に他の生活の手段として、人間のあらゆる生活に交渉を持っているがためであらうと考えられる。

(11)そこで重要なことは、言語が、他の人間の諸生活とどのように交渉し、関連するかということである。

(12)言語は、何よりも、人間生活全体の中で切取られる必要があるのである。

<コメント>

英語で「読む」「聞く」スキルだけでなく「書く」「話す」のスキル 4 技能の大切さが叫ばれ、ようやく 2020 年の大学入試でこの 4 技能の配点が同一になるが、よく考えれば母国語である国語も日本語という「語学」の一つで、この 4 技能の修得が求められる。おくれればせながら、時枝先生の本著で言語としての国語の大切さがよくわかった。

— 2016 年 2 月 21 日(日) 林 明夫記 —